

修正案【提案書】KOKUYO「鉛筆シャープ」を使用可能にすることについて

企画 令和4年12月1日

職会 同12月20日

校長 榊 正文

1. 案件概要：今日お諮りしたいことは

- ① 3年生以上について、KOKUYO「鉛筆シャープ」に限って学校で使用可能にする。1, 2年については、筆箱の指定のルールとの兼ね合いから当面見送ることとし、継続検討する。なお、鉛筆専用スペース(1本ずつ入れる場所)は厳しいと思われるが、名前ペン等が入られるスペースであれば、入るはずである。
- ② この提案書で示す条件を満たすシャープペンシル(以下シャープペン)の使用許諾の申し出が保護者からあれば、担任から引き継いで管理職が判断し認めた場合は、その情報を教職員で共有する。
- ③ この導入に合わせて、鉛筆・シャープペンの持ち方の再指導を行う。

2. これまでの経緯と提案理由：

観察した事実)

漢字の書き取り中、力が入ったのか鉛筆を置いて手を振っている児童をしばしば見かけた。そこで、各学級で児童の鉛筆の持ち方を観察したところ、オビタイムでは、正しい持ち方をしているのは、3～6年の各クラス5～10%程度であった。(ただし6-2は30%程度)

※正しい持ち方をする必要性 正しい持ち方は、持続して学習できる力、丁寧な字を書く力、正しい学習姿勢を保つ力につながる。

これまで、上記の課題に対応するため、全国的に鉛筆を使用していると理解していたが、課題は達成できているとは言えない。また本校では、シャープペンは禁止されているが課題への改善の取り組みは、特になされていない。(児童に聞くと、家庭や塾ではシャープペンを使っているとのこと)

学習指導要領や枚方市教育委員会にシャープペン禁止の文言はなく、中学校ではシャープペン禁止のルールは見当たらない。何人かの教職員にインタビューするなどして本校の禁止の理由を推察すると、次のとおりである。

禁止している主な理由)

- ①シャープペンだと「とめ」「はね」や「はらい」の表現が上手くできない。

- ②シャーペンの細い芯だと毛筆感が出しにくい。
- ③握力がないので、字が薄くなる。
- ④児童は力の加減がしにくく力を入れると芯が折れやすい。
- ⑤高額なシャーペン競争になりがちで買えない人もいる。
- ⑥分解して遊ぶ。ノック音がうるさい
- ⑦コンセントに刺すと危険、折れた芯が刺さる、食べる、など。

シャーペンより鉛筆が良い理由)

- ①「とめ」「はね」「はらい」の表現が上手くできる。
- ② 太い芯の鉛筆のほうが指導しやすい。
- ③ 1年生のスタートは同じにしたい。
- ④ 鉛筆は手入れが楽で故障しない。長期間でも劣化しない。安い。
- ⑤ 削っているか保護者に確認を課すことで筆箱の状況をチェックしてもらえらる。

シャーペンのメリット)

- ① 削る必要がない。(エコである)
- ② 家で削って来なさい、今は削らないで、などの指導が減る。
- ③ 削りカスが出ないので、汚れが減る。

鉛筆シャープの概要)

今回議題に載せるのは、KOKUYOの「鉛筆シャープ」である。上記課題になった点の多くを解決してくれると考える。鉛筆シャープは「鉛筆」と「シャープペンシル」のハイブリッドでシャーペンのような使い方であるのに、書き心地は鉛筆と似通っている。価格は、200円(税別)程度からである。(替芯は税別200円程度)



鉛筆シャープをすすめる理由) 禁止する理由①～⑤に対応

① 書き心地、握り心地は鉛筆と同様である。三角形と六角形から児童に合ったものを選ぶことができ、三本の指を使って自然に持ち方を習得できる可能性を持つ。太さ、長さがほとんど鉛筆と同じ様に作られている。中学年は、若干太い三角形を推奨する。

② 芯は0.7～1.3ミリで、濃さも様々あり、学年や筆圧に合わせて指定することができる。3年生以上は0.9ミリ～に指定する。また濃さはBまたは2Bを指定する。(KOKUYO推奨。高学年は0.7を選択してもよいが、他校の調査では芯が若干折れやすくなることがわかっている)

③ 書き心地は、削って少し使ったぐらいの芯がずっと続く感じで書くことができる。

④ 鉛筆と同じようにとめ、はね、はらいを意識した字を書くことができる。

⑤ 芯は、太芯のため折れにくくなっている。

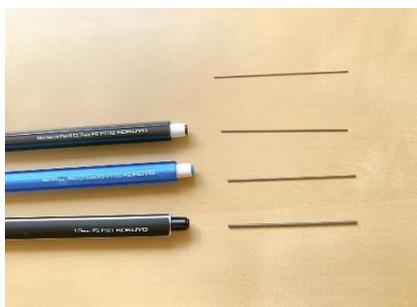


鉛筆シャープをすすめる理由) 禁止する理由⑥⑦に対応

① 鼻栓は、取り外しにくい構造で分解しにくい。芯の補充は鼻栓を取り外す必要はなく、鼻栓から入れるだけである。ペン先はやや取り外しにくい構造になっている。

② ノック音が気になる児童はいるかもしれないが、これにより集中を欠くというならば、タイピング音の方が大きく、頻繁である。

③ ペン先の金属部は、使用しない時は収納されるので、ケガのリスクは低減される設計である。子どもなので遊ぶことはあり得るが、鉛筆・消しゴム・筆箱・定規・ハサミ等でも遊んでいるので、リスク全般については、他の文具や持ち物と同様にキチンと指摘し指導していくことで徐々に防止できると考える。



考察まとめ 結論)

児童がどのような文房具を使うかは原則自由であり、そこを踏まえたとで最適な教育のために学校が指定してきた。今まで長く慣習的に行ってきたものが変化する際、適応面で一定の困難さはあるかもしれないが、タブレットの導入と同じく、今便利で児童・保護者・教職員にメリットになるものは積極的に使っていきべきと考える。



3. 実現における課題：

4. 検討期限:

12月企画会議で決定し、「五常小のルール」に反映するとともに、児童・保護者にレターを配布する。(配布時点から使用可能)

5. 参考:

ゼブラ株式会社が、2015年12月に、全国の小学生300人を対象に行った「小学生のシャープペン使用実態調査」の概要

約半数の小学生が日常的にシャープペンを使用している。

シャープペンの使用を禁止している小学校が多いため、主に塾や自宅で使っている。

シャープペンを使い始めた学年に関しては、小学校の3、4年生からが多い。

(字を書くことに慣れてきたころに鉛筆からシャープペンへ移行する傾向がみられる。

1年生から使っている子どもは約2割。

使っている理由の第一は

「シャープペンのほうが書きやすいから」

「鉛筆を削るのが面倒くさいから」

「かっこいい、かわいいから」

使わない理由は、

「学校で禁止されているから」がほとんどである。

「家や塾ではシャープペンを、学校では鉛筆を使っている」という使い分け派は23人。

子どものシャープペンの使用について保護者の意見

シャープペン使ってよい派

削らなくて良いのでエコ。経済的。

学習意欲が湧けばそれでよい。

高学年になると問題数が多くなるので効率的。

シャープペン使わない派

まだ力加減ができないのでシャープペンだと芯が折れる。

持ち方、書き方を覚えるまでは鉛筆で。

高学年からなら使ってよい。

■「鉛筆の筆記線のように濃くてなめらかだから」という理由で、0.7ミリ以上の太い芯のシャープペンを使っている小学生もいる。

<まとめ>

早いうちから家や塾では、鉛筆ではなくシャープペンを使っている小学生が多くいる。

一方、小学校でシャープペンを禁止している理由の一つとして、ペンの持ち方に慣れていない小学生だと芯が細いシャープペンは折ってしまう、という点がある。

しかし近年、各メーカーから鉛筆のように芯が太いシャープペンや、機能的に芯が折れにくいシャープペンが発売されている。

調査項目 小学生のシャープペン使用状況 * シャープペンを使い始めた学年 * シャープペンを使う理由 *シャープペン芯の太さについて